



【学校教育目標】

知・徳・体のバランスの取れた人間

性豊かな生徒の育成

【4つの伝統】

あいさつ・歌声・清掃・ボランティア

【目指す生徒像】

☆思いやりのある生徒

☆自ら学び、自ら考え、自ら行動する生徒

☆やり遂げる力を持った、たくましい生徒

☆自校を愛し、郷土を愛し、その発展に尽くす生徒

視点を変えてみること

校長 矢部智史

7月に入りました。この時期らしい梅雨空が続き、畑の農作物も順調に育っているように見えます。しかしながら、この状況が極端に長引けば日照不足による生育不順や病気が発生してしまうのですから、適度な梅雨の空模様を期待するのは難しいものだと思えます。

さて、今回の学校だよりのテーマは人間のことでありません。自然界に生きる野鳥の話です。大抵の野鳥は人間が近づくと飛んで逃げて行ってしまいます。以前、北海道の釧路湿原に行った時、200mくらい先にタンチョウを見つけ写真に収めようとそっと距離を縮めたところ、ほんの2、3歩動いただけなのにさっと逃げられてしまいました。その後もことごとく撮影に失敗し、何て人間に敏感なのだろうと驚いたものです。スズメやカラスでさえ簡単に距離を縮められるものではありません。ところが、そんな野鳥にいとまやすく1～2mまで近づく方法を私は知っています。どんな方法だと思いますか？実は、トラクターに乗って畑を耕すことで、野鳥に接近することができます。トラクターは大きくて音も凄まじく、人間にとっても近寄りがたい存在ですが、鳥たちは私がいてもお構いなしに近づいてきます。大きなサギの仲間やカラス、ムクドリ、セキレイなどがトラクターを取り囲んで一緒についてきます。お目当ては、畑に隠れているミミズやカエル、飛び立つ虫です。彼らにとってトラクターは（トラクターに乗っている人間も）危害を加えない存在どころか、恩恵を与えてくれる仲間のような存在に映っているのでしょう。人間単体は危険だけど、トラクター＋人間は危険ではなくなる。知能が高いと言われているカラスがそう判断しているのですから、恐れ入ります。また、私自身も野鳥に危害を加えようと思っていないわけですから、野鳥に心を見透かされているような気にさえなります。鳥たちは生命の危険を感じる対象の人間を、生命の維持に役立つ存在として、視点を变えて捉えていると考えるのは言い過ぎでしょうか？



「視点を変えれば見える世界や価値観が変わってくる」私が常々大切にしている考え方です。多角的・多面的に物事を考えていく中で、バランスのよい決断と行動をしていきたいと思っています。「言うは易く行うは難し」ですが、その発想が頭の中にあるかないかで大分結果が変わっていると実感することが実に多いのです。「相手の気持ちになって」というのも視点を变えて考えることの良い例です。トラクターに乗りながら、近くに寄ってくる野鳥を見てふと思ったことです。